

歌謡調臺灣行脚 (三)

西川榮一

d r m f s l t d r m f s l t d r m f s l t d r m f s l t d r m f s l t d r m f s l t d r m f s l t d r m f s l t d

南方漁港の歌

一

濃い思案は一先よして
エンヤラホーノホー
早くお出でよ南方漁へ
陸にや千里の金庫の屏風
海にやつきせぬ魚の幸
日本なー

日本男兒の腕ためし
エンヤラヤのヤー
エンヤラヤのエンヤラヤの
エンヤラホーノホー

二

蕃漁好いとこ臨海道路受けて
エンヤラホーノホー
バスで通へばタロコ峽
神の黒の景勝泉は
所きらはず　湧き出づる
夏はナー
夏は海水浴場で君を待つ
（繰返し唄）

三

蕃漁艇にドント打つ波は
エンヤラホーノホー
そりや押せそりや潜げ重統を
船は新造でも櫓廻りやようても
主さん乗らなきや動きやせぬ
可愛ナー
可愛いお方の度胸だめし
（繰返し唄）

四

山の幸を裏の海に
エンヤラホーノホー
寫す姿は南方漁
集ふ日本の海國男子
洋にしぶきのカジキ旗
投げりやナー
投げた針先狂やせぬ
（繰返し唄）

五

モタン市場の魚の山は

エンヤラホーノーホー
バレンカヂキに艤や艪
立てよ鍬腕潮の風に
夕は大漁わが妻に
冬はナー
冬は雪の南方溟
（繰返し唱）

六
海の祭の氏神様は
エンヤラホーノーホー
霊験あらたな海の守護神
拝め朝夕海男海女
家には日の丸稼し
祈れナー
祈れ明日の大漁を
エンヤラヤノヤー
エンヤラヤのエンヤラヤの
エンヤラホーノーホー

三十一里の旅

……東海パスの歌……
……翔野尾登作詞……
……岡本新市作曲……

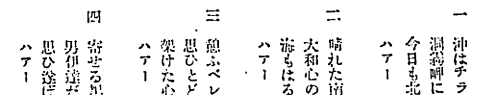
一
沖はチラチラ銀魚艘
洞窟岬に　千鳥よる
今日も北風　大漁か
ハアー　バスは雲の上　島景角

二
晴れた南溟の碧波は
大和心の一筆映
海もはるばるルツキヨフ
ハアー　あれに見えるは琉球島

三
鯨ふべレフン紫明湖
思ひとどかぬ濁水溪
架けた心の一筋に
ハアー　結ぶ鳥船と飛行艇

四
寄せる黒潮　清水の
男伊達だよ　断崖に
思ひ遂げたか　バスの道
ハアー　あれはなつかし花蓮港

五
奥は千古の神秘境
砂金流るゝヌツキリ溪
里にや甘藷の波うてば



ハアー　タロコ小唄が流れ来る

六
ひろいカレイワン牛の群
空にや雄々しい銀の翼

七

また飛ぶ〳〵ゴルフ場
ハアー白いボールが夕陽に映える

花崗山の夕暮の
坐ろ浮立つジャズの音
三十一里を後に見て
ハアー眺め見あかぬバスの旅

双溪小唄

……小野正雄作詞……
……赤尾寅吉作曲……

一

つとく山々ソレ三領嶺に
赤いつゝじが花咲き初めりや
若い血潮も燃えそめる
ソウ　ソ　ソウケイ
ヨイヤサノサ　雙溪

二

富も昔のソレ雙溪嶺に
とけてもつれる涙みの人へ
合ひの流れのさゝめ言
ソウ　ソ　ソウケイ
ヨイヤサノサ　雙溪

三

月にそむいたソレ蝙蝠山は
顔の紅葉をかくして居れど
ヨイヤサノサ　雙溪

四

草鹿あたりのソレ白雲小窓
流いた涙の雫の珠が
實つて咲いたか山椿
ソウ　ソ　ソウケイ
コイヤサノサ　雙溪

瑞芳小唄

……重家四吉作詞……
……S　O　生作曲……

一

唄の瑞芳山から山に
赤いつゝじが燃えてさく
サアサ流れる小川の底を
ほれば黄金の砂も湧く

二

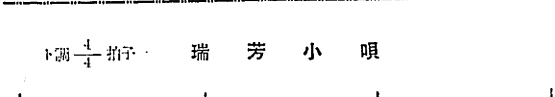
日本一よと其の名も光る
こゝは九分雙坑石
サアサ山から谷間にかけて
いつも黄金の花ざかり

三

八重の汐路も濠洲でゆけば
山の上から一とながめ



唄小芳瑞　　4/4拍子調ト



サアサ読んだ白帆のかげにアジンコートの灯が見える

四

山ちや美流汐なら澤潟あびて眺めて砂の上

サアサ絹見く小唄の中にや可愛い娘の聲もある

五

汐に消んだあの聲聲は

あれぞ恋たいの鼻頭角

サアサ殴打つ男浪の上におどる旅烏は無雲坂

六

酢はほがらかありや楽つみ唄

竹の小笹をもれてくる

サアサ　こちらは旅烏小唄

唄でほり出すクロダイヤ

省線めぐり（五）

二水郎　山本清一

豫定より三十分遅れて二時半に上陸して来る。心なしか乗客に面やつれの者が多い。聞けば某所を出るとすぐから低気壓に因る雑踏で親子共門司まで一食も出来ず往生したと云ふ。平常の精進が悪るいからの事よ、僕など精進の善い上に親孝行だから僕の乗つた高砂丸など少しも揺れず、却つて腹が減らず困つた位だつたと云ひ乍らも兎に角無事を喜び、豫定の韓戸市内半日の見物を止して直ちに神戸驛に走り次發に向ふ。之までは二等パスで勿體振つて見栄を張つて二等車にフンゾリ返つて旅行したけれど以後は妻の汽車賃が入るのでお間合ひに三等旅行だ。乗つて見ると臭くもなければ、汚くもない。乗客すべてがよく訓練された旅行道徳の出来た者許りで却つて氣がゆつくりして働きが実なくて愉快だ。大部分の旅